

帆船〈あこがれ〉の「セールトレーニング」が始まったそのときへBACK! (その1)

海洋冒険や海の文化事業などで顕著な功績を残した人や団体を表彰するMJCマリン賞2013の大賞に選ばれたのは、今年3月をもって活動を終了した大阪市の帆船〈あこがれ〉だった。20年にわたって一般市民を対象に「セールトレーニング事業」を続けてきた同船の足跡を、同じ時期に民間組織で事業展開した帆船〈海星〉とともに紹介したい。※次々号まで3話の連載になります。



2006年4月の「長崎帆船まつり」に参加した〈あこがれ〉の勇姿。1994年から大阪市が始めた自治体初のセールトレーニング事業は20年にわたって続けられ、3万人以上のトレーニーが貴重な帆船航海を体験し、いまでもそのOBやOGたちの輪が結ばれている

1994年の出来事

- | | |
|-------|------------------------------------|
| 2月12日 | リレハンメル・オリンピック開催。 |
| 4月 8日 | バンド、ニルヴァーナのカート・コバーンが自殺。 |
| 5月 1日 | F1サンマリノGPで、アイルトン・セナが事故死。 |
| 6月27日 | オウム真理教による松本サリン事件発生。 |
| 7月 8日 | 日本人初の女性宇宙飛行士、向井千秋氏、スペースシャトルで宇宙へ。 |
| 8月28日 | 気象予報士国家試験開始。 |
| 10月 | イギリスの数学者、アンドルー・ワイルズがフェルマーの最終定理を証明。 |

音楽：Mr.Children「Tomorrow never knows」、EAST END×YURI「DA.YO.NE」、奥田民生「愛のために」
映画：「シンドラーのリスト」、「男はつらいよ 拝啓車寅次郎様」

若者よ、海に出て、ともに競い合え!

動力船が常識の時代、大型帆船（以下、帆船）を過去の遺物のように思う人も少なくないが、いまでも日本を含む多くの国が船乗りの育成に帆船を使っており、ヨーロッパでは毎年、たくさんの帆船が集まって外洋レースが実施されている。

かつて、筆者はこのレースを取材したことがあるが、開催地の港で行われた参加帆船の一般公開には見学者の長蛇の列ができ、広場にはさまざまな屋台が並んで移動遊園地までやって来て大いににぎわった。

スタートでもたくさんの観覧船が用意され、陸から眺める人と合わせて相当な数の人が見守るなか、大小さまざまな帆船がヨットレースと同じように一斉にスタートラインを横切る様子は、迫力に満ちていた。

ちなみに、レースのルールはヨットのISAF（国際セーリング連盟）と同じように、ISTA（国際セールトレーニング協会）という国際機関によって定められ、IMSのように各帆船の性能によってレーティングが決まるハンディキャップシステムが確立されている。簡単に言えば、かの地では帆船もヨットと同じほどの存在感があるということだ。取材当時、ヨーロッパには300

を超える帆船が現役で動いていると聞いたが、今になってその数がいくらか減ったとしても、日本で外洋レース活動をしているヨットよりは多いに違いない。

もっとも、ヨーロッパの帆船が常に大切にされてきたわけでもない。第二次大戦後、動力船の進化とともに、もはや帆船の活躍の場はなくなったと見切りをつけられたときがあり、1956年には、最後の花道としてヨーロッパ中の帆船を集めて英国〜ポルトガル間でレースイベントが開催された。

ところが、このレースイベントは最後を飾るフィナーレとなるどころか、「もっと続けてほしい」といった声が世界中から集まってしまう、その後も、開催地を変えながら定期的に行われるようになって現在も続けられている。

また、こうした流れのなかで注目されたのが、帆船が持つ教育効果だった。古くから海軍や商船の実習用として、航海技術の習得のために重用されてきた帆船ではあったが、つらいこともある航海を通じて決断力や責任感、仲間を思いやる心などを養えることから、人間教育の場として一般人、特に青少年も乗せるべきであるという考えが1930年ごろに誕生。その後、この教育理念は戦争によって忘れられかけたが、先に述べたイベントを経て帆船とともに見直されるようになった。

こうして、1950年代から欧米各国が、残っていた帆船を使って一般人を対象にしたセイルトレーニング（体験航海学習）を盛んに行うようになり、乗船して操船を体験学習する人のことをトレーニー（訓練生）と呼ぶようになった。また、いつしか帆船レース自体もセイルトレーニングレースと称されるようになり、「若者が海に出て帆を操り、ともに競い合うために」という合言葉が生まれていった。

国内の動静

ヨーロッパで生まれた一般向けのセイルトレーニングが本格的に日本で始められたのは、1990年代に入ってからになる。商船乗りの実習用として使われていた〈日本丸〉、〈海王丸〉が老朽化したため、1970年代後半から当時の運輸省（現 国交省）で代替案が検討されたが、大蔵省（現 財務省）が「ロマンに付ける予算はない」と回答。そこ



ジャパン インターナショナル ボートショー 2013会場にて、〈あこがれ〉はMJCマリン大賞を受賞した



受賞会場には、ボランティアクルーが駆けつけてメインセールアップのデモンストレーションを行った



大賞受賞の挨拶をする、大阪港振興協会の五十嵐英男会長

で代替船建造運動が始まって、〈日本丸〉の映画が作られるなどして多くの人の関心が集まり、〈日本丸〉には予算が付いて1984年に代替船が竣工。〈海王丸〉も、多くの一般募金に日本船舶振興会（現 日本財団）の助成が加わって1989年に竣工にこぎ着けたが、この〈海王丸〉二世が誕生した際に、同船で一般の研修生も受け入れる枠組みが生まれていた。多くの寄付によって進水できたことから、その返礼として検討されたそうである。ちなみに、〈あこがれ〉、〈海星〉ともになくなったいま、この制度が唯一、一般人が日本の帆船に乗れる道になっている。

それにしても、帆船を単なるロマンチックな乗り物としか評価できなかった旧大蔵省の不勉強さにはあきれざるばかりだが、建造運動が起きて2隻とも代替できたのだから、わが国民の意識も捨てたものではない。2隻の大型帆船を持つ国は世界でもまれであり、フルセールで走る姿は壮観で多くの人を魅了する。〈日本丸〉が洋上でアメリカの

大型空母とすれ違った際には、先方の士官、クルーがデッキにずらりと並んで敬礼したという（相手に最敬意を示す登舷礼）。

大阪港に集まった150万人の大観衆

さて、この2隻の帆船の代替建造が検討されたころと時を同じくして、国内ではにわかに、新しい帆船を浮かべる夢が生まれつつあった。〈海星〉と〈あこがれ〉のことであるが、まったく異なるところで、ほぼ同時に同じ夢が語られていたことは奇遇というほかない。

最初にその夢を実現した〈海星〉のキーマンの一人が、同船の運営を担った旧日本セイルトレーニング協会の今井常夫氏である。今井氏は帆船にあこがれて東京商船大学（現 東京海洋大学）に進み、視力が足りなかったことから機関学科を選択したが、帆船による実習は航海学科だけだと知って失望。しかし、在学中に代替船建造運動のなかで〈日本丸〉の映画を作った演



日本を代表し、世界でもその美しい姿が知られている〈日本丸〉。旧大蔵省から「ロマンに付ける予算はない」と言われたが、多くの人の努力によって代替船建造の夢が実現。現在でも多くの船員が〈日本丸〉から巣立っている



ロンドン橋を背に、テムズ川を走る練習帆船〈海星〉。1991年から英国でセイルトレーニングを開始し、2004年に財団が解散するまでに、延べ2万5千人以上のトレーニーを育てている

「何百ものヨットやボートに見送られながら
出航する帆船の姿を日本でも見たかった」



出家の蜷川幸雄氏から、「海外の帆船なら一般人でも乗れる」とセイルトレーニングの話聞いて発奮。1982年に英国セイルトレーニング協会の帆船〈マルコム・ミラー〉に日本人として初めて乗船し、下船後に「セール・リスボン」という帆船レースを視察。そのレポートを舵誌に掲載したところ、編集部も驚くほどの反響を得た。

「セイルトレーニングはトレーニーの自主性を尊重しながら行われ、英国各地から参加していた若者と充実した時間を過ごしました。ですから、プログラムの組み方次第で一般の人たちも帆船の航海に受け入れら



山岡真澄（やまおか・ますみ）

1956年大阪府生まれ。大阪港振興協会、大阪港開発技術協会を経て、現在は大阪港埠頭株式会社に勤務。五十嵐氏同様、大阪市の帆船、ヨットの国際イベントに参画する傍ら、〈あこがれ〉の運営・広報担当として長年にわたって尽力した。

れることを実感することができました。また、セール・リスボンでは、スタートを見送るために何百という数のヨットやボートが集まったことに圧倒され、いつか日本でもこうした光景を見たいと願いました。そのため、帰国してからセイルトレーニングを立ち上げる道を模索しながら、自分がヨーロッパで体験したことを舵誌に寄稿したのですが、記事の反響は大きく、編集者も『アメリカズカップの記事でも、こんなに感想の手紙が届くことはない』と言っていました」（今井氏）

今井氏は記事の反響を背に受けながら、定期的にセミナーを開いてセイルトレーニングの話を広め、帆船小説で知られる高橋泰邦氏とともに「日本トルシップクラブ」を結成した。

一方、そのころ、大阪市では大阪城築城400年記念事業として、日本初の帆船パレード「'83大阪世界帆船まつり」の準備を進めていた。そのスタッフの一人として日々奔走し、後年には〈あこがれ〉の運営や広報を担った山岡真澄氏は、当時をこう振り返る。

「築城400年記念事業で帆船が浮上し

今井常夫（いまい・つねお）

1958年山口県生まれ。東京商船大学（現 東京海洋大学）卒。1982年に日本人で初めて英国の帆船〈マルコム・ミラー〉のセイルトレーニングに参加。帰国後、日本トルシップクラブを設立。1990年に大儀見 薫氏らと「日本青年帆船協会」（現 日本セイルトレーニング協会）を立ち上げ、翌91年から帆船〈海星〉でセイルトレーニング事業を開始。93年に国土交通省所轄の財団法人として設立。1998年に同協会を離れ、2002年まで〈あこがれ〉の事業に参画。現在は米国系ライブエンターテインメント企業の日本法人代表を務める。

五十嵐英男（いがらし・ひでお）

1944年大阪府生まれ。大阪市港湾局を経て、現在は公益社団法人 大阪港振興協会 会長。「'83大阪世界帆船まつり」を皮切りに、「メルボルン大阪ダブルハンドヨットレース」、「セイル大阪'97」、「ワールドセール2000」などの帆船、ヨットのイベントに参画する傍ら、〈あこがれ〉の運営責任者として長年にわたって尽力。今年3月には、〈あこがれ〉を代表してMJCマリン賞2013大賞を受賞した。

「日本人には船や海に通じるDNAが脈々と残されているのではないかと思う」



たのは、大阪市が『セール・アムステルダム』という帆船イベントを視察したことがきっかけでした。天候が悪く、帆船の参加が少なかったにもかかわらず、それを大勢の市民が取り囲んで大歓迎しました。その光景を見て、当時、港湾局の課長だった佐々木 伸さんがいたく感動され、帆船やヨットに、多くの人を集める力があることを悟ったようでした」

大阪市は、かつて市内の運河や水路に立てられていた『落つくし』という水路標識のデザインを市章に使用しており、古くから出入りの船で栄えた交易都市として知られている。市の繁栄を担った船や海の文化を築城400年記念事業につなげたいと考えるのは、ごく自然な発想だったに違いない。

もっとも、この時点では、誰一人として、将来、大阪市がセールトレーニング事業を行うとは夢にも思わなかったそうであるが、佐々木氏の発案は大いに当たり、世界の帆船が大阪港をパレードする「'83大阪世界帆船まつり」は150万人もの人出で大いににぎわった。

「かつて、あれほどの人が大阪港に足を運んだことはありませんでした。ですから、



久下剛也（くげ・たつや）

1962年兵庫県生まれ。〈あこがれ〉進水時からクルーとして乗船し、船の運用、トレーニーの始動などに励みながら、「セイル大阪'97」、「ワールドセール2000」などのイベントレース、航海にも参加。2008年から最後のキャプテンを務め、今年3月の事業終了まで〈あこがれ〉に乗船した。



大海原を豪快に進む〈海王丸〉。〈日本丸〉同様、代替船建造案が宙に浮いたときもあったが、多くの国民の寄付に日本船舶振興会（現 日本財団）の助成が加わって二世号が誕生。寄付への感謝を込めて、現在は一般の乗船枠も用意されている



1983年の「大阪世界帆船まつり」を伝える、当時の舵誌。世界の帆船が一堂に会したこのイベントは、ほとんど帆船を見たことがない一般市民の度肝を抜き、なんと150万人の来場者数を記録。大阪市港湾局がヨットレースやセールトレーニング事業に力を入れる足がかりになった



大阪世界帆船まつりから14年後の1997年には、〈あこがれ〉がホスト役を担って東アジア初の帆船レースを香港～沖縄～九州～大阪間で実施。最終フィニッシュ地の大阪港で開催された参加帆船によるパレードでは、見学者が埠頭を埋め尽くした

帆船に見入る人たちを見て、鎖国の時代もありましたが日本人の体の片隅には船や海に通じるDNAが脈々と残されているのではないかと思います」

そう振り返るのは、当時、山岡氏とともに大阪市港湾局職員としてこのイベントを担当し、後年、港湾局長を経て〈あこがれ〉の運営母体である大阪港振興協会で重職を担った五十嵐英男氏である。

「'83大阪世界帆船まつり」では、あまりにも忙しかったため帆船を見るのも嫌になったそうだが、祭りの後の静けさから思わぬプランが出て、五十嵐氏と帆船との縁はさらに深まっていった。

志の風が吹く

五十嵐氏と帆船の縁をつないだのは、



香港の帆船〈志風（ジファン）〉の事業を紹介する舵誌。同船は、1983年の大阪世界帆船まつりに参加した際、セールトレーニング事業を大阪市にすすめてくれた。〈志風〉が大阪にやって来なかったら〈あこがれ〉は生まれなかったかもしれない、と多くの関係者が口をそろえている

「'83大阪世界帆船まつり」に参加した香港の帆船〈志風（ジファン）〉だった。同船は、香港の競馬団体から、若者の自己啓発を目的に登山やカヌーなどの野外体験活動を展開するアウトワード・バウンド・スクールに寄贈された帆船で、あらゆる年齢層を対象に航海プログラムを組んで実績を重ねていた。

その話を、同校の校長が大阪市を訪れた際に語り、「同じような活動をして市民に海を体験してもらったらいかが」と市の関係者に提案。また、港湾局長の職に就いた佐々木氏が市民のための帆船構想を検討。その結果、市長の賛同を得て1985年から「市民海洋カレッジ帆船建造計画」が立ち上げられた。

「世界からやって来た帆船を見て、スタッ



航海の安全を守りながら、先頭に立って波を砕く〈あこがれ〉のフィギュアヘッド。進水以来、20年の間に地球を8周以上回る距離を同船とともに走り抜け、3万人以上に及ぶトレーニングの夢をかなえてくれた



第1回メルボルン大阪ダブルハンドヨットレースで総合優勝を手にした大儀見 薫氏（左）。この後、セールトレーニングに深い関心を寄せて、今井常夫氏とともに〈海星〉の事業を進めていった

「私たちは『大阪市でも帆船を持ちたいね』といった話はしていましたが、〈志風〉の話などから、皆、セールトレーニングのすばらしさを次第に理解するようになっていきました」(山岡氏)

大阪市が帆船を持って運用するとなれば、それなりに資金が必要だ。一般会計で行うとすれば議会の承認が必要で、その壁は高かったに違いないが、そこは港湾局の事業として行い、海洋文化の普及に寄与するという趣旨でクリアした。当時、港湾局は埋め立て事業を推し進めていたので、造成した土地の売却利益や賃貸料で十分に賄えたのである。セールトレーニング事業を生涯学習などの教育目的で進めようとしたら、予算取りは難しかったはずだ、と関係者の誰もが口をそろえている。

その一方、今井氏も日本トールシップクラブでセミナーを開きながら地道に賛同者を集めていたが、こうしたなかで1986年にISTAのアシスタント・レースディレクターを務めるイアン・フィッシャー氏が本業の銀行員として日本に赴任した。

そこで、日本トールシップクラブが彼を講師に招いて「帆船とセールトレーニングのすべて」というセミナーを開催したところ、佐々木氏をはじめとする大阪市の関係者も上京してセミナーに参加。また、当時、NORC(旧 日本外洋帆走協会)の副会長を務めていた大儀見 薫氏も、高い関心を寄せて来場した。

「このとき、佐々木さんが大阪市で帆船を建造する計画を大儀見さんに話し、大

儀見さんも『いつかは自分もセールトレーニングの事業に携わりたい』と返していました」(今井氏)

佐々木氏と大儀見氏の二人が顔を合わせたことは、日本のセールトレーニング史の1ページだったと振り返る今井氏。実際、二人はフィッシャー氏の話に耳を傾けながら、立案した計画の具現化をめざし、「いつかは自分も」と大きな夢を抱いたのである。

その翌年、やはり大阪市港湾局が企画した第1回メルボルン大阪ダブルハンドヨットレースが開催され、山岡氏や五十嵐氏がスタッフとして参画するなか、大儀見氏は自らレースに出場して総合優勝に輝いた。

当時、大儀見氏は西武セゾンの重役だったが、堤 清二社長に長期休暇を願い出てレースに出場。そのことが一般にも話題となって、世間の目はレースの行方にも集まった。

「猛烈に働くことが当たり前だった時代ですから、重役がヨットレースに出たくて長期休暇を願い出て、また社長がそれを認めたことがセンセーショナルでした。おまけに優勝したので、注目は高まるばかりでした」

そう語る今井氏にとっても、大儀見氏の知名度が上がったことで、夢に向かうステージが一気に高まった。以前から経済界に顔が広がったことに加え、レースに勝ってさらに知名度が高まった大儀見氏が、ともに帆船の建造に向けて寄付金を集めることになったからである。

(次号へ続く)

記者の目

今回は、本連載が始まって初の3号連載となった。というのも、知らない読者のためにセールトレーニングやISTA(国際セールトレーニング協会)などのあらましを簡単にでも紹介しておかないと先に進めないからである。

「若者が海に出て帆を操り、ともに競い合うために」というセールトレーニングレースの言葉は、いまでも脈々と伝え続けられており、ISTAのホームページを見ると、今年のレースは秋に地中海で開催される予定になっている。

そこに〈あこがれ〉や〈海星〉が参加できな

いのは残念だが、この20年で育ったトレーニーの数は2隻合わせて5万人を超えており、彼らの心のなかには、帆船で海を走った記憶がはっきりと刻まれている。

海で苦労や喜びを分かち合った仲間の絆は消えることがない。今回の記事ではMJCマリン賞の授賞式の写真を掲載したが、ご覧のとおり、船上生活をともにした仲間が大勢駆けつけ、五十嵐さんや山岡さん、久下キャプテンをたたえた。その深い絆をうらやまばかりである。